近代史に残る一大汚点
――関東大震災下の虐殺事件から学ぶ

労働者教育協会・理事　藤田廣登

この9月、関東大震災から100年を迎えました。大震災が起きたとき、朝鮮人・中国人への虐殺、労働運動家・社会主義者への虐殺が行われました。震災に乗じて行われたこの許されざる事実について、労働者教育協会・理事で、映画「わが青春つきるとも―伊藤千代子の生涯」原作者の藤田廣登さんに寄稿してもらいました。

（写真は藤田さん提供）

プロローグ　首都に潰滅的打撃
――関東大震災の発生

今から100年前の1923（大正12）年9月1日、正午直前の11時58分、相模湾北西部を震源域とするM（マグニチュード）7・9の都市直下型の巨大地震が関東地方を襲い、2日までに6回のM7以上の余震に見舞われました。罹災地は東京・神奈川・千葉・埼玉・山梨・茨城・静岡の1都6県にわたる関東一円にわたることから「大正関東地震」と呼ばれています。

この大地震では、約340万5千人が罹災、家屋の倒壊、直後に発生した火災等により10万5000人余の死者・行方不明者を出し、多数の負傷者と離散難民が近隣、郊外へと脱出を図りました。死者は東京府下約7万人、神奈川県下約3万人と、この二都市に被害が集中し、市民の安全を守らなければならない警視庁は全焼、東京府内の警察署63署のうち全焼・倒壊25署という潰滅的状況におかれました。

軟弱地盤地域に木造家屋が密集するという都市づくりが火災犠牲者（死者総数の96％）を生み出すという災害を拡大したのですが、ここまでは一応自然災害としましょう。しかし、これから見ていく事実は100年前の日本に実際に起きた「加害・殺傷行為」です。

▶亀戸事件犠牲者葬儀（青山斎場）出発前（1924年2月17日）。南葛労働会事務所前で。2列目左から3人目が渡辺政之輔。3列目右端、政之輔母テフ。6人目川合サダ（川合義虎妹）

◀亀戸事件犠牲者の碑（亀戸・赤門浄心寺境内）

Ⅰ　戒厳令下に軍隊・警察、武装自警団の朝鮮人・中国人虐殺

（1）流言飛語を煽った政府当局・警察

被害の拡大と不安の増大の中、「鮮人が放火、井戸に毒を投げ込んでいる。鮮人が攻めて来る」などの流言飛語が生まれました※。本来、行政や警察はこれらの根も葉もない流言を鎮静化させ、国内外の被災者全員の救援活動に全力をあげるべき時なのにその逆でした。こともあろうにこれらの流言飛語を煽ったのが、国や行政、軍隊、警察、新聞メディアだったのです。

※明治・大正期に植民地化された朝鮮半島出身者を蔑称「センジン」などと呼んだ。震災当時の新聞に「不逞鮮人」などという言葉がおどっている。この時期に朝鮮半島出身者が道路、河川、鉄道工事、鉱山などの重労働に就労していた。

①政府当局の対応

内務省警保局長は9月3日午前、海軍船橋無線電信送信所から各自治体に、「不逞鮮人から身を守るための自衛の道を講ずる」よう打電、こうして各地に急速に竹槍、刀、鳶口、棍棒などで武装した「自警団」が組織されていきました。

②警察の対応

警察署の対応について文芸評論家の中島健蔵氏は、9月2日の見聞を「神楽坂警察署の…黒い板塀に、大きなはり紙がしてあった。それには警察署の名で、目下東京市内の混乱につけこんで『不逞鮮人』の一派がいたるところで暴動を起こそうとしている模様だから、市民は厳重に警戒せよ、と書いてあった」と記しています（『昭和時代』岩波新書）。

③戒厳令・軍隊の出動

パニックと混乱の続く中、9月2日、政府・内務省は東京市全域に戒厳令※を発令、3日には神奈川、千葉、埼玉の各県へと拡大しました。こうして首都圏全域が5万人余の軍隊の管理下に置かれ、そのもとに警察・武装自警団（在郷軍人会、消防団、青年団、隣り組など）が組み込まれて、住民の救援活動より治安維持的活動が前面に出るようになっていきました。

関東大震災に乗じた朝鮮人・中国人虐殺、社会主義者弾圧事件は、軍隊と警察が公認し、自らも手を下し、それに排外主義に煽られ疑心暗鬼に駆られた民衆が虐殺に加担して行ったのです。こうした背景、その国家的犯罪の構図、本質をつかんでおく必要があります。

※戒厳令　戦前の大日本帝国憲法は第14条で「天皇は戒厳を宣告す」と規定し、戒厳を宣告する権限は天皇にあった。戒厳令が発せられるとその地域の行政権・裁判権の一部は軍の管理下におかれる。戒厳令は、日露戦争直後の「日比谷焼打ち事件」、ついで「関東大震災」、「二・二六事件」の3回発令された。

（2）軍隊が虐殺の先陣

軍隊が虐殺に乗り出した瞬間を、千葉県「習志野騎兵第16連隊」に所属していた越中谷利一は「：戒厳令が下って習志野騎兵××連隊が出動し

新日本出版社　〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-6 ☎03-3423-8402 FAX 03-3423-8419
www.shinnihon-net.co.jp info@shinnihon-net.co.jp ☆送料 300 円
（着払いご利用の場合、ご注文税込金額 2500 円未満は送料 800 円）

石川康宏 関野秀明 萩原伸次郎 山口富男
マルクス『資本論』をコンパクトに解説!!
今、『資本論』をともに読む
新版『資本論』の学習ガイドに最適な一冊
私たちはなぜ生きづらいのか。個人の努力だけでなく構造を変えるべきなのでは。現代から見た面白さや未来社会論を論じ、新版『資本論』の特徴も語り合います。
◉定価：本体1800円＋税／A5判／ISBN978-4-406-06747-8

新版 資本論 全12分冊
カール・マルクス 日本共産党中央委員会社会科学研究所 監修
◉セット本体：21,600 円＋税（分売可）
①⑤⑩⑫＝本体各 1700 円＋税
②④⑥⑦⑨⑪＝本体各 1800 円＋税
③⑧＝本体各 2000 円＋税
ISBN978-4-406-06387-6

《科学的社会主義の古典選書》エンゲルス 著　浜林正夫 訳・解説
イギリスにおける労働者階級の状態 上 下
資本主義の母国・イギリスの解放にむけ成長する労働者階級の姿を、克明な現地調査に膨大な事実資料を加えて青年エンゲルスが息詰まる迫力で描く。
◉《上巻》定価：本体1700円＋税《下巻》定価：本体1600円＋税／A5判

日本共産党青年・学生委員会 坂本茂男 著
資本主義の告発者とパンデミック
マルクス、エンゲルスの足跡から
19世紀のコレラ・パンデミック。当時「世界の工場」とも言われたイギリスで、その悲惨に直面したマルクスとエンゲルスは、貧困にあえぐ労働者に深刻な犠牲が出ていることを現場から調査・告発。それを資本主義のしくみの解明にも生かしました。今の世界を捉える上でも参考になるその歩みを、現地調査も含めて追った労作です。
◉定価：本体1600円＋税／四六判／ISBN978-4-406-06760-7
『月刊学習』の好評連載が単行本に
「見えない恐怖」をどう体験しどう向き合ったか
序　章　コレラの恐怖
第1章　若きエンゲルスの目に映る社会の矛盾
第2章　マンチェスターのコレラ流行
第3章　『状態』にみるコレラ・パンデミック
第4章　医療の実態とエンゲルス
第5章　ブルジョアジーとプロレタリアートの貧困をめぐる対決
第6章　『状態』後のエンゲルスのふりかえり
第7章　マルクスの壮絶なコレラ・パンデミックの体験
第8章　クリミア戦争とコレラ
第9章　エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』をうけついで
第10章　『資本論』と『公衆衛生報告書』
第11章　『物質代謝』の視点からパンデミックを考える
第12章　マルクスの細菌学への関心と公衆衛生の発展

知る学ぶ

たのは九月二日…亀戸駅付近は罹災民でハンランする洪水のようであった…一名の朝鮮人が引摺り下ろされた。数千の避難民監視の中で、安寧秩序の名の下に、逃れようとするのを背後から×××××××××（伏字・正文＝白刃の銃剣下に次々と）仆れたのである。

と、避難民の中から、思わず湧き起こる嵐のような万歳歓喜の声。国賊！

朝鮮人はみな殺しにしろ！」（『戦旗』28年9月号「戒厳令と兵卒」）と自らが出動に参加した体験を述べています。

（3）日本人殺傷も

新劇俳優の千田是也氏（本名・伊藤圀夫、くにお）は、千駄ヶ谷駅近くで自警団に「なまり」をとがめられ危うく殺されそうになったことへの抗議の意を込めて「センダガヤのコリア」をもじってその名を付けました。

また、千葉県福田村（現在の野田市など）では、9月6日、神社で休憩していた香川県の行商人15人が出身地を疑われて、子どもや妊婦を含む9人が約200人の村民自警団に囲まれて殺害され、その遺体は利根川に遺棄されました。「福田村事件」と呼ばれるこの事件は、行商人が部落差別で行商でしか生きていくことの出来なかった人々であったこと、地元での隠蔽が続いたこともあり知られていませんでした。2003年、現地近くの野田市三ツ堀の円福寺大利根霊園に追悼慰霊碑が建立され、追悼会が行なわれています。

この事件では8人が逮捕され、裁判に付され、実刑が下されましたが、朝鮮人・中国人虐殺のほとんどと、のちに述べる社会主義者虐殺については法廷さえ開かれず、不問に付されたままです。

Ⅱ　労働運動家・社会主義者虐殺事件――「亀戸事件」

この関東大震災の混乱に乗じて、「主義者が暴動を煽っている」というもう一つのデマが流布され始めます。この時の労働運動家、社会主義者などの虐殺事件には二つの背景があります。

一つは、前年の1922年7月15日、わが国に初めて科学的社会主義理論に導かれた日本共産党が創立されました。その指導による日本共産青年同盟（略称・共青。民青同盟の前身。中央委員長・川合義虎（よしとら））は、震災の年の23年4月5日、約15人の革命的青年が集まり結成され、青年の中に影響が広がっていました。こうした革命運動の高揚と青年運動の前進を国家権力は恐れていました。

二つは、その影響力を最もよく受け継ぎ、わが国の階級的労働運動のメッカをなしていたのが東京・南葛（なんかつ）地域であり、中核となる南葛労働会（本部・亀戸）が存在し、その影響下の労働組合が拡大されつつあったのです。亀戸署の蜂須賀特高課長らは、大震災下の混乱に乗じて、この地域の労働運動に潰滅的打撃を加える絶好の機会ととらえたのです。

また、戒厳令の布告と発動の中で3日には「不逞団体蜂起の事実……」なる文書が発せられ、戒厳令による軍事制圧の対象が朝鮮人狩りとともに「不逞団体」、つまり社会主義者集団などに向けられていくのです。それは、直後に起こった次の三つの事件に顕著に現れています。

（1）第一次共産党事件収監者の憲兵隊引渡し未遂事件

震災発生直後の3日、抜剣した東京憲兵隊が護送車数台を用意して市ヶ谷刑務所の大野所長に対して、「共産党事件の被告全員を即時引き渡せ」と要求しました。後難を恐れた所長が開門を拒んだため、渡辺政之輔、市川正一、徳田球一など数十人の社会主義者が虐殺をまぬがれました。

（2）亀戸事件――階級的労働運動への攻撃

共青委員長の川合義虎と同盟員の山岸実司は、震災当日、翌日に迫った「世界青年デー」準備のため都心部にいました。激震を受け徒歩で帰路途中、倒壊家屋の下敷きになっている母子4人と遭遇、かろうじて幼児3人を救出、上野近辺に野宿、ミルク・ビスケットを与えて保護。南葛労働会事務所に帰りつき、直ちに組合員の救援活動や夜警活動などに全力をあげていました。そこを亀戸署の蜂須賀特高課長の一隊が狙い打ちしました。一部の活動家は夜警に出ていて難を逃れました。

そのころ、戒厳令により亀戸地域に展開した近衛師団習志野第13騎兵連隊は、兵営を出る時から着剣して亀戸駅周辺で「朝鮮人狩り」をしながら亀戸署へ到着しました。署内には、傷だらけの朝鮮人、中国人など数百人が縛られたまま送りこまれていました。その中に拘束された川合義虎はじめ10人の活動家が含まれていて、4日深夜から5日にかけて軍隊により虐殺されたのです。

こうした軍隊の暴虐について、古森亀戸署長は、「（軍隊の虐殺行為は）やむを得ぬ処置」と語っています（東京朝日新聞・大正12年10月12日付）。また軍部では、「戒厳令下の処置としてやむを得なかった」とその行為を不問に付しました。

「犠牲者の碑」建立

こうした中で、渡辺政之輔などの発起で翌24年2月17日、亀戸事件犠牲者の葬儀が青山斎場で日本初の労働組合葬として行われました。30年3月末、上京した小林多喜二は、5月3日、亀戸地域を訪れ「南葛魂」を学びとり、その後の小説「転形期の人々」「党生活者」「地区の人々」などに活写しました。

戦後、亀戸事件犠牲者追悼運動が高まり、70年9月4日、「亀戸虐殺事件建碑実行委員会」によって江東区亀戸・赤門浄心寺に「亀戸事件犠牲者の碑」（10面右下写真）が建立されました（赤門浄心寺＝JR亀戸駅から徒歩10分）。

（3）甘粕事件

また、無政府主義者の大杉栄・伊藤野枝夫妻、甥の橘宗一（7歳）一家の甘粕大尉による殺害事件が9月16日に引き起こされました。

▲犠牲者の顔写真（中筋宇八除く）

「亀戸事件」犠牲者リスト

氏名	年齢	出身地	共産党員	共青	南葛労働会	純労	拘引場所
川合義虎	22	長野・上田	○	○ 初代委員長	○ 創立に参加		南葛労働会事務所
加藤高寿	27	栃木・矢板			○ 創立に参加		〃
北島吉蔵	20	秋田・鹿角	○	○	○ 創立に参加		〃
近藤広造	20	群馬・総社			○ 小松川支部		〃
鈴木直一	24	不明					〃
山岸実司	20	長野・上田		○ 結成に参加	○ 亀戸支部長		〃
佐藤欣治	22	岩手・江刺			○ 吾嬬支部		吾妻支部事務所
吉村光治	24	石川・金沢		○	○ 吾嬬支部長		〃
平澤計七	34	新潟・小千谷				○	自宅
中筋宇八	24	不明				○	平澤宅から

※氏名・年齢は赤門浄心寺「犠牲者の碑」による。出身地・所属組織などは「亀戸事件のしおり」等による。筆者作成。

エピローグ

大震災下で虐殺された犠牲者は、①朝鮮人600人余、②中国人600人余、③日本人89人に上ると言われます。ところがわが国は、未だその実態の全容調査や被害者・遺族への公式謝罪、補償も行っていません。その延長線上に、政府内に「朝鮮人虐殺の「記録はない」（8月30日、松野博一官房長官）などのごまかしの発言があり、小池百合子都知事の7年連続の朝鮮人犠牲者追悼式への「追悼文不送付」やヘイトクライムの横行があります。

当時の読売新聞は「文明史に遺る一大汚点」と題して、「未曾有の大震大火災が生んだ結果とは云え人心を戦慄する虐殺事件が至る所で殆ど公然と行はれた事は此の記念すべき震災と共に千載に遺る文明史の一大汚点である」（大正12年10月11日付）と書きました。

当時から今日まで、国家が関与した加害・虐殺事件にきちんと向き合わない姿勢も「わが国近代史の一大汚点」と言えましょう。

私たちは、これらの「事件」を見ることはできませんが、歴史を正しく学ぶことにより「真実」をつかみ、再びこうした事態を引き起こさない日本人として生きる力を身につけることが求められています。

（本稿の執筆に当り、加藤文三著『亀戸事件』『川合義虎』『渡辺政之輔とその時代』、先行者の研究論稿を参照にさせていただきました。）